

# 3F・E・T

たった一枚の写真が、百万遍の議論よりも人々の心を掴み、世の中の趨勢に多大な影響をあたえる事が出来るのと同様に、たった一枚の写真が「個人的」な人間の社会生活や生命までも握り潰してしまふ事も出来る。まして写真とは、キャプションひとつで読者の心を目に操れるというバクダンを常に抱えているのである。

この素晴らしい媒体を権力者の世論操作や、常に不満を抱え込んでいる多くの庶民の一瞬のカタルシスとして大量に生産されていく姿は、とてつもなく巨大な歯車に押し潰されていくジャーナリズムの「良心」の悪夢を見ている様である。

しかし、もともとジャーナリズムとは、原生動物によく似た物で、なんでもかんでもペン毛で捕え、飲み込んで消化し、あっという間に増殖していつてしまふという特性がある。良くも悪くも、写真週刊誌とは、現代の「活字が信用を失ってしまった」ジャーナリズム畑に咲いた大輪の花であることには間違いない。

この秋に新たに二誌の参加を生み、ますます活気を呈してきた写真週刊誌とは——写真週刊誌の原型を作った老舗FOCUS(81・10・30創刊・金曜日発売・新潮社)——芸能記事で発行

部数一位を奪い取った芸能人の鬼門RIDAY(84・11・23創刊・金曜日発売・講談社)——特集記事中心から週刊誌化へ踏み切った文春ジャーナリズムEmma(85・6・5創刊・86・9・24から週刊誌化・水曜日発売・文藝春秋社)——そして新たに参入したソフト・ムードが売り物のTOUCH(86・11・4創刊・火曜日発売・小学館)——週刊宝石の色が出せるか人間礼讃誌を自称するFLASH(86・11・19創刊・水曜日発売・光文社)巷間、この五誌を称して3F・E・Tと呼び、日本の主要大手出版社五社が全力を傾け、およそ六百万部といわれる市場(現在先発三誌で約三百万部を発行)を争っていく。

さて、その実体は、見開き2ページに写真を一点(最近では、ターゲットの人物を別々に写し、二点並べて掲載する場合もある)64ページだて。記事は約3分(国電の駅と駅との間の時間)

で読み終る、かなりオチクリをきかせた物。そして、カメラマンの名前が入るがライターは覆面。サイズは二つ折りにしてGパンのポケットに入り、値段は百五十円なり。内容は、まるでテレビのワイドショーの画面を切り変える様にページをめくられて、スイッチを切る様に読み捨てられる——センサーショナルでスキヤングラスなエロ・グロ・覗き趣味・他人の不幸・有名人のセックス、大企業や政治家の「不倫」を少々と血を滴らせた無名のイケニエを少々。隠し味に、社会正義もほんの少々……。

時には、駅の売店や書店などから一瞬にして雑誌が売り切れてしまうという魔術を使い、スクープ合戦には、スーパーウェポン——カバンカメラ、自動車電話、盗聴器、特殊無線etc etcを使いこなし、有名・無名のプロカメラマンや、御節介で目立ちたがりやで、他人の仕事を覗き見て、物知り顔で告げ口をする「無言の大衆」を味方に、あらゆる方向からもターゲットを包囲していく。

はつきり言って、我々は噂話は大好きだし、悪い事にはマユをひそめるだけで、自分には関係ないとタカを括って生活している。つまり、この写真週刊誌の内容は、「絶対に売れる商品」であり、また、我々自身の等身大の姿でもあるのである。

しかし、これで本当にいいのであるうか。ジャーナリズムの使命とは、我々の本当の「快感」とは、権力を持つ

ていて、高慢ちきで、何もかも自分の思いどおりになると信じている大バカ野郎の仮面を剥ぎ取ることではなかったのか。けって弱い者を棒で打ち、差別し、葬り去ることではなかったはずである。

写真週刊誌は、多くの読者を得たのと同時に、多くの読者に「手にするのもしゃ」と嫌われてきている。話題になるのは、大スクープではなく「人権守れ」の東京法務局の勧告や、藤本義一氏の執筆拒否発言等である。こちらあたりで本物のスキヤングル——ゴジップではない大スクープで点を稼がなければ、「火のない所に煙を立て続けた」ツケが回って台所が「火の車」てなことになりかねない。

今、持てる力を最大限に使って「フオーカス」しなければならぬことは何か。今後のレンズ・アイに注目しよう。